

「随筆」 雪は変わららず、社会は変わる

星川 保松

雪は何億年前の太古から降っている

水の惑星ともいわれる地球ができたのは四十五億五千万年前頃といわれる。初めは熱球だったが、しだいに冷えて表面の温度が太陽熱に左右されるようになる。日射の弱い北極や南極の水は氷（個体）になり、日射の強い熱帯や温帯の水は蒸発し、水蒸気（気体）は雨雲となって移動して陸上にも雨をもたらした。それが湖や川になった。

地球は自転しながら、一年かけて太陽のまわりを一周する。その公転軸に対し自転軸が少し傾いている。そのため、北半球と南半球に交互に春夏秋冬の四季が訪れる。冬を迎えた地域の雨は雪になって降り積もる。こうして尾花沢にも雪が降るようになったが、それ以来、冬には何億年も雪が降り続け、今後何億年と降るだろう。

雪国に最初に住みはじめた動物は、雪の冬も平気で越せる毛皮をつけた熊や狸や兎などに違いない。人間は毛皮は着てないし、何を生で食っても消化できるような丈夫な胃腸ももたない。それで、堅穴に掘立小屋を建て、火を焚いて暖をとり、食物を煮たり焼いたりしなければならぬ。こうした生活を共同で行うため集団（社会）で雪国に移住した。

縄文人が住みだしたのは一万年ほど前

日本列島に人間が住むようになったのは西暦前一万年前後で、その遺跡は千島から沖縄まで分布している。遺跡から縄目の文様の土器が出るので「縄文時代」というが、縄文人は野山で動物を狩り、芋を掘り、木の実を採り、魚を捕ったりの「狩猟採取」の生活をしていた。縄文遺跡は雪国でも発掘されており、雪は生活の妨げではなかったようである。昔、堅雪になると歩いたりスキーで山へ遊びに行った。雪の上には動物の足跡がついていて、その足跡をよく見ると、兎か狸か、また何匹、いつ頃、どっちへ行っただかが分かる。足跡をたどれば巢穴にたどり着ける。実際、村人が巢穴に煙をかけ、苦しくなって出てきた狸を捕まえて、狸汁を食ったという話もあった。だから縄文人も雪が降ったら狩りができると喜んで違いない。縄文人の「和雪」の知恵である。

田畑の耕作を始めた弥生人

この縄文時代は西暦前四世紀頃まで続き、その後、田畑を耕す「農耕社会」の「弥生時代」になった。稲作水田には多量の水を必要とする。雪は、高い山にも丘にも積んで保存される特殊な水資源である。山の雪解け水は夏まで川の水量を豊かに保ち、里山の雪は沢に貯水池を築けば灌漑用水として利用できた。特に水田稲作の農耕社会にとって、雪は水資源としてきわめて大きな恩恵をもたらした。弥生人の「利雪」の知恵である。

雪の滑りを利用した橇の時代

昔、車といえば荷車のことだった。雪が降れば荷車は車輪と荷台に分解し物置に入れ、橇の部品を取り出し仕組み、雪に接する面の鉄板は砥石で磨いた。鉄橇はきわめて滑りが良く、平らな所なら米の五・六俵を積んでも軽々と引けた。

自給の燃料の薪は、秋に山の木を伐って積んで置き、雪が積もってから橇道をつけて家に運んだ。橇の道は田畑だろうが誰の所有地だろうが、春の耕作に邪魔をしなければ、どこにでも造れた。また自給の飯米は、「人は三俵猫一俵」を用意した。人の分は一人三俵、それに猫の分一俵であるが、猫はペットではなく鼠退治の役目があった。猫がいないと猫のいる家の鼠まで集まってきた、何俵食われるかわからないからである。

道路の雪は平にしておけばよかった

道路には雪があっても橇や歩行をさまたげないよう平にしておけばよかった。町でも隣家と接近した家並では、屋根の雪も道路にししか出す場所がなかった。昔、店は間口の広さで税金を取った。そのため、屋敷の区割りは間口が狭く奥行き長い形になり、建てた家は「うなぎの寝床」といわれる、ひよる長い家になった。車社会になり道路に一切雪が置けない今では、この昔の家の形と家並の構造は大きな問題になっている。

滑りに弱い車の社会と道路の完全除雪

豪雪地帯に車社会が到来したのは終戦後のことである。郷里の金瓶村(現在の上山市)に疎開していた歌人の斎藤茂吉が「冬」という一文の中に、進駐軍の道路除雪作業に驚いて「ふかぶかと積もりし雪を戦車もて進駐軍は除去しはじめつ」と歌っている。ブルドーザーのキャタピラを見て戦車と思つたらしい。こうして道路の除雪が始まり、橇の時代が終わったが、豪雪地帯には膨大な除雪費という新たな負担のしかかってきた。

東は御所山から西は猿羽根山まで、雪は満遍なく積もる。だが雪は降る場所によって人との関係が異なる。山の雪は水資源、降れば降るほどよい。田畑の雪は自然に消える。国・県・市道の雪は行政の分野。屋根と屋敷の雪が市民の責任。最近、雪を苦にして逃げ腰の市民が多い。これでは過疎化が進むばかり。古里を捨てどこに楽園があるのだろうか。

尾花沢市に何トンの雪が降るか

計算式を三七四(市の面積 Km^2) \times 一・五(平均積雪深 m) \times 〇・五(平均比重)とする。平年の積雪総量は約二億八千万トンになる。この運賃を一トン十円としても二十八億円になる。これだけの膨大な雪を、天は日本海から月山を越して無料で運んでくれている。すばらしい天の恵みである。これを利用できないのでは罰が当たるといふような気がする。

温暖化で降雪量はどうか(私見)

地球温暖化で雪は少なくなるという人もいる。列島の日本海側に大雪が降るのは、赤道の方から暖流(黒潮)が北上し、それが沖繩付近で二手に分かれ、本流は日本列島沿いに太平洋を北上し、分かれた対馬暖流は日本海に入って北上する。この暖流から発生する水蒸気に、零下何十度というシベリア寒気団が吹き当たり大量の雪をつくりだしている。これが豪雪の原因であるが、地球温暖化で対馬暖流の温度が上昇している。当然、水蒸気が増えれば降る雪の量も増えることになる。この先何億年も降るこの雪を「資源」として活用したいものである。何時かきつとその日が来るだろう。(〇一二年二月)